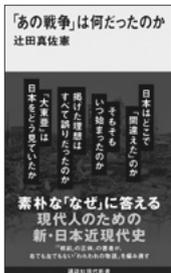


太平洋戦争を紐解きながら 歴史を考察する力を磨く



『あの戦争』は 何だったのか』

辻田真佐憲 著
(講談社、1155円)



渡部 晶 わたべ・あきら

1963年福島県平市（現・いわき市）生まれ。京都大学法学部卒。1987年大蔵省入省。財務省大臣官房地方課長、沖縄振興開発金融公庫副理事長、財務省財務総合政策研究所長などを歴任し、2024年7月退官。いわき応援大使、2024年3月放送大学大学院修士（学術）、日本政策投資銀行設備投資研究所 所長主任研究員。

郷土の歴史はそれぞれの地域のシビックプライドのもとになるものとしてとても重要だ。本書は郷土の歴史のなかでも描きづらい「先の大戦」（著者のいう「あの戦争」）について、現代に生きる私たちがどのように「われわれの物語」としてふたたび受け入れるかについて考察している。著者は1984年生まれ、近現代史研究者で『古関裕而の昭和史 国民を背負った作曲家』（文春新書）など多数の著作を有する。

本書の構成は「はじめに」「第一章 あの戦争はいつはじまったのか—幕末までさかのぼるべき?」「第二章 日本はどこで間違ったのか—原因は『米英』か『護憲』か」「第三章 日本に正義はなかったのか—八紘一宇を読み替える」「第四章 現在の『大東亜』は日本をどう見るのか—忘れられた『東条外交』をたどる」「第五章 あの戦争はいつ『終わる』のか—小さく否定し大きく肯定する」「おわりに」となっている。

地域との関係では、第5章に注目したい。著者は「世界の多くの国々では、首都や大都市の中心部に、大規模な国立の歴史博物館が設けられ、とくに近現代史や軍事史の展示では、対外戦争や独立戦争など、国家の形成にかかわる重

要なできごとが中心に据えられ、それぞれの国の『国民の物語』が明確にされている」一方、「日本において、あの戦争が特別な地位を占めていることは、国立の近現代史博物館が『存在しない、というかたちで象徴的にあらわれている』とする。また、1999年に東京・九段下に開設された「昭和館」の展示では「戦争がまるで自然災害のように突如としてひとびとに襲いかかったかのような印象を与えかねない」とし、「戦時中も比較的安定した暮らしを送っていた財閥や大名華族など、一部階層の存在はほとんど描かれていない」ことを指摘する。

このような展示のあり方は、地域にある郷土史の資料館で仮に近現代を展示する場合にもとられがちなものだろう。だからこそ、著者は「基本的には自国の歩みを肯定しつつも、過ちや課題についても正直に記す姿勢が望ましい」とし「満点を目指すよりもあえて六五点くらいを目標とする」ことを提案している。こうした姿勢は戦史にかぎらず、さまざまな歴史を紐解き、未来を切り拓くうえでも重要ではないか。本書は2026年新書大賞6位となった話題作。一読をオススメする。